

三万三千柱の慰霊碑だからである。私と台湾出身者とは、永遠の絆で結ばれている。残された人生を大切に生きていきたいと念願している今日である。

ボルネオ

## 第二十二特別根拠地隊

岐阜県 保木 松右衛門

農家の次男として、現在の岐阜県吉城郡国府町で生まれた私は、家を継ぐ立場になろうとは思っていませんでした。姉は既に嫁ぎ、兄は軍隊に入っているが、帰って来れば家業の農業に従事するだろうと、半ば安心した次男坊でいたのです。

大正十年六月五日生まれでしたから、昭和十六年徴集で兵隊検査を受け、第二乙種、第一補充兵となり、歩兵の八番ということであります。そのため、軍隊へすぐ行くことは無いと思い、昭和十七年に神奈川県にある相模原陸軍航空支廠に入所、八カ月間勤務をし

ているうち召集令状が来ました。陸軍かと思っていたところ、昭和十八年九月海軍へ召集というので、ちょっと驚いてしまいました。しかも呉海兵団入団となりました。

呉で改めて検査を受け、甲種ということになり、徳島航空隊へ転属、三カ月の新兵生活を送ったのです。海軍の新兵の教育は誰でも知るように極めて厳しいものでした。そうしなければ誇りある帝国海軍の水兵にはなれぬからでしょう。バットで尻のアザが消えることはなく、海軍軍人としての基礎を徹底的に仕込まれた三カ月でした。

次は航空隊から自動車学校での教育が二カ月間あり、運転技術を身につけ、一等水兵となり、元の呉海兵団へ戻りました。しかし、海兵団にいたのは二十日間、南方へ勤務、転属となり、「讃岐丸」という輸送船に乗船しましたが、もう昭和十九年となり、制空・制海権は既に連合軍の手中にあり、敵の潜水艦は南方各海峡に出没し、船の航行は危険極まりないものになってしまっていました。我々兵隊には細かいことは判

りませんでしたし、どこをどう航行しているかなど知る由もなかったのです。ただ四十日間も船の中にいたわけです。そしてその間、私は水兵でなく、上等機関兵（陸軍の上等兵）に進級したのです。

ようやく上陸したのはジャワ島東海岸の港スラバヤでした。そこは海軍の第二南遣艦隊の所在地であり、我々の司令部第二十二特別根拠地隊はボルネオのバリクパパンにありました。私の勤務隊はボルネオ東海岸のサマリンダでした。

バリクパパンは有名な石油の産地であり、スマトラのパレンバンなどと共に、我が日本の油の産地であり、これらの油田、精油所から送られたり、補給された油で帝国海軍の軍艦や航空機、輸送船等が活躍できるといふ重要な石油の供給地であるわけで、まさに「ガソリン一滴、血の一滴」といわれた石油の基地でした。

サマリンダは、バリクパパンの北々東一〇〇キロ足らずの所にあった重要な場所で、マハカム川北岸であり、飛行場も建設されていました。我が隊は、警備

兵、飛行場整備兵など各種の兵が、中尉を隊長として一〇〇人ぐらいで編成されていて、その他にインドネシア人を一〇〇人ほど使っていました。要地の確保も任務でしたが、飛行場の整備・警備も重要な任務で、私は主として各種自動車の運転に従事するという少ない技術者であり、蘭領地時代のオランダの発電機の操作も仕事の一つでした。そのため、私は二等機関兵曹に任官したのです。

飛行場の整備のためトラクターを使って草刈りもしなければなりません。そのうちに、比較的安全であった東南アジア、インドネシア方面の戦況もだんだんと悪化し、先に申した制空・制海権は連合軍の手中に握られるようになったといえます。

昭和十九年五月には連合軍機動部隊がジャワ島に來襲しましたし、ボルネオ方面にも連合軍機が来襲するようになりました。連合軍の飛行士はなかなか勇敢で、低空で襲撃し、機銃掃射をする射手の顔が見えるほどでした。しかし、案外、我々が伏せている所を撃たないで兵舎などを攻撃します。だが元オランダ軍の

建物には爆撃しなかったようでした。敵は米・英海軍航空隊の艦上機だったようです。

昭和十九年後半になって、大空襲を受け、サマリンドアの飛行場が爆撃され、せっかく整備をした飛行場は大被害を受けました。我々は幸いにジャングルの中に逃げ込み、負傷を免れ、我が隊員の犠牲は少なくて済みました。しかし、機材や建物の被害はありました。

インドネシア地方の人達は、比較的日本軍には好意を持っていました。オランダの植民地となり、白人の下で暮らしていたからでしょう。昭和十六年開戦のころ、日本軍の航空隊が空襲し、原田兵曹長機が低空で墜落、戦死をしたことがあり、その原田兵曹の遺骸を葬り、飛行機のプロペラを墓標として建てて、祀ってくれました。我々は軍人として、日本人として、インドネシアの人々に感謝していました。インドネシア人の多くが、勤務中に果実などを届けてくれたり、部落の長老が、我々を踊りなどを見に来るよう招待してくれることも、しばしばありました。人心は概ね、日本人になつていったように思っていました。

しかし、その反対の事件もありました。ある十人ぐらい勤務していた分哨とか分遣隊に、敵性のインドネシア人が、単独でいた日本兵を殺し、蕃刀でその兵隊の首を切り落として持って行ったのです。敵性オランダ人か元オランダの現地人部隊が、現地人に、日本兵の首を持って来いと言ったらしく、日本兵の首には懸賞金がかかっていたという話でした。私はその兵隊の親指を切って火葬にし骨を持っていて、故郷が北海道というので、北海道へ帰る兵隊にそのお骨を御遺族に届けてもらいました。

昭和十九年の末になるとフィリピンのレイテ島は米軍に占領され、戦線はルソン島へ移り、インドネシア各地もだんだんと厳しい状況に追い込まれていったわけですが、我々にはそのような状況を知るよしもなく、ただ、敵の空襲のたびに穴だらけとなった飛行場を修復したり、機関銃で敵機を射撃したり、治安維持に努めていました。

一番大きな空襲は約一三〇機の来襲でした。四発の発動機の大爆撃機に戦闘機がついて来ましたが、我が

軍に迎撃する飛行機はなく、防空隊も充分でないの  
で、敵機のなすがままで、どうにも仕方ありません。  
我が隊には二〇ミリ機関銃が二銃、歩兵銃が二〇挺程  
度しかないので、被害を少なくするため退避す  
るしかなかったのです。

我々海軍の陸上部隊第二十二特別根拠地隊の司令官  
は鎌田中将で、陸軍と異なっているいろいろな部隊で編成  
されていました。しかし、その範囲はボルネオとセレ  
ベス両島ですから相当広いのです。ジャワ、スマトラ  
は第三十一特別根拠地隊でした。

七月には、ボルネオ島のバリクパパンに連合軍は上  
陸しました。いよいよボルネオの陸上戦が開始されま  
した。今までの対空、対ゲリラ戦とは違った逼迫した  
状況になったので、我々も戦闘準備をするのですが、  
先程申したように戦闘兵器は二〇ミリ機銃二銃と小銃  
二〇挺の、寄せ集めの小部隊ですので、いざ陸戦とな  
ればと覚悟を決めていました。

終戦は八月二十五日ぐらゐまで気付きませんでした。  
正式には特別根拠地隊の本部から知らされまし

た。我々の心境は「ここで死のう」という人、「殺さ  
れるであろう」と思う人もあり種々でしたが、結局  
は、集結地カナボクへ行くことになりました。そこで  
は周囲はバリケードで囲まれ、四カ所に機関銃を持っ  
た兵隊に監視されました。

監視はなかなか厳しいものであり、時々使役にも使  
われました。食料は連合軍から支給されるのですが、  
途中で「猫ばば」され、我々はタピオカのお粥のよう  
なもので命をつながなければならず、そのため、抑留  
期間に栄養失調、アメルバ赤痢、マラリアなどで死亡  
する者も多くありました。

昭和二十一年五月、米国のLSTが迎えに来て、各  
部隊混合で乗船しましたが、岐阜県高山の人が一人い  
ただけで、ほかは東北地方の人が多かったようでした。  
名古屋に着いたのは忘れもしない私の生まれた  
日、六月五日でした。

一晚岐阜県の世話課に泊まり、翌日高山へ着きまし  
た。私は帰るということを全然家へ知らせておらず、  
実家では、海軍へ行って徳島航空隊へ入隊したという

ことしか知らなかったので、どこへ行ったのか判らぬし、もちろん生死も判らなかったので、皆、驚くやら喜ぶやらでした。

兄が、昭和二十年九月、サイパンで玉碎したことを初めて知りました。私は昭和十八年九月海軍に入りましたが、兄は一度還って来て、二度目の召集で岐阜の連隊に入り、その後、兄の部隊はサイパンに渡り玉碎したということで、夢にも思わぬことでした。

私は帰ってから三年間は、マラリアのため高熱と悪寒に苦しみました。家では後継者の兄が戦死してしまったので私が家を継ぐことになり、主として米作と、肉牛の繁殖飼育をしています。牛は外国産に押されがちなので、質の良いものを飼っております。一年に一度仔牛を産むので、十カ月飼育して市場へ出します。

このような現役の仕事が出来るのも、強健な体と精神と労苦・訓練に耐えた海軍生活の賜物であると感じる日々です。しかも、我々と共に兵隊に行った人々の多くが戦没していることを思えば、その方々の冥福を祈る日々でもあります。